

## 学部長挨拶

狩野 陽

1996年度、社会情報学部シンポジウムに皆様のご参集をいただき、有難うございます。

本シンポジウムは、学部創設を記念してその夏に開き、爾後、学部のもっとも重要な研究の行事の一つとして社会と情報に関わる各研究領域を代表し、先鋭な研究を産出されている研究者のご報告をもとに自由な討論を重ねてまいりました。

シンポジウムも6回を重ね、学部も創設6年目を迎えています。社会情報学の学部である限り、統一的なユニット、あるいはマルチユニットとして組織された学問領域を形成することが所属する研究者の共通の希いであり、殊に、体系的な修学と訓練、社会情報学の方法を身につける方途を定位するディシプリンの熟成と確立は学部の責務でありました。

これまで日本の大学での進歩と権威は専門の分化と研究分野の確立にあるとする通念があります。そして専門分野の確立が研究者と研究共同体のアイデンティティを支え、知的展開の共有の場となるという期待が現在でも生きていて、当然と思われています。

昔、日本の大学制度の設立に当たっての調査に答えて、ドイツ統一を成し遂げたビスマルクは、大学の講座制を勧め、学者を大学の狭い専門の座に据え、専門の研究に専念せしめれば、学者たちは、世の中にとってうるさくなく、用いやすく、国家にとって有用であるとの趣旨を述べています。これは官僚組織による仕事の有用さと通じるメリットでしょう。問題は、私たちにとって専門分野の統一が固定観念になり、更にそれが強迫観念に近いところにあります。

このシンポジウムが社会と情報に関わるという、広い、茫漠とした印象を与える標題をあえて掲げて続けてきた趣意も、社会情報学という新しい学の形成に向かって領域の確立の固定観念から自らを放って、関連する問題とその解決を見定めつつ、知と方法を積み重ねて収斂してゆくことにありました。

幸い、この春、社会情報学会も発足し、より広い共同の場が拓けてまいりました。

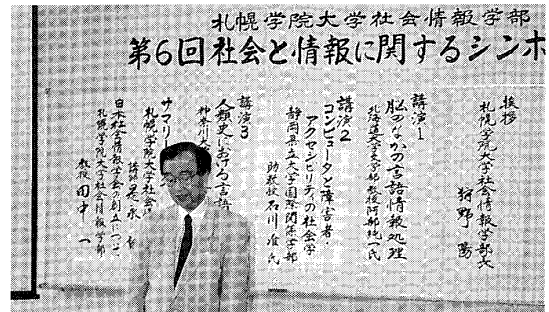
このシンポジウムも、新たな展開のあり方を模索するとともに、広い関連分野の研究の源泉を跡づける試みを継続することになります。

この夏のシンポジウムは、言葉の問題に関して、認知心理学を代表する視点から、脳内の言語情報処理について、北海道大学の阿部純一先生に、言語の起源の人類史的考察を、量子物理学から経済学に進まれ原子力の問題を取り扱われた、神奈川大学の川上幸一先生にご報告いただき、さらにコンピュータと障害者の問題を、ご自身の体験から照射してアクセシビリティの社会学を、静岡県立大学の石川准先生にご報告いただく貴重な会合となります。

ご講演と討論の労をお執りいただき、有難く、厚くお礼申し上げます。

北海道の夏の会合はクール・サマー・シンポジウムの名があるのに、今日は雨もよいで湿度が高く、この中で、シンポジウムに、お集まりいただき、深く感謝申し上げます。

遠慮のない、率直な、ご発言のシンポジウムの進行を、せつに期待いたします。



狩野 陽氏